特 集 に よ せ て

名古屋大学附属図書館館長・同研究開発室長
松　浦　好　治

名古屋大学附属図書館では、平成13（2001）年４月に、研究開発室を設置しました。今年で10周年を迎えます。

大学図書館における研究開発機能の重要性は、昭和27年６月に発表された「大学図書館基準」（大学基準協会）にも、「（大学図書館の機能を発揮するには）その業務の改善を図るための研究・開発機能を併せもたなければならない」とあるように、早くから認識されてきました。

しかし、専任教員を有する研究組織をもつ大学図書館はごく限られ、名古屋大学附属図書館研究開発室の設置も、平成13年度を待たねばなりませんでした。それは、新たな電子環境の下、大学図書館が如何にその機能を発揮するかが大きな課題として認識されていた時期であり、附属図書館研究開発室は、それ以降、ハイブリッド・ライブラリーに関する研究開発、デジタルアーカイヴィングによる古文書等コレクション資料の高度活用化等を推進してまいりましたが、大学図書館をとりまく環境はさらに変貌を遂げつつあり、研究開発の必要性はいよいよ高まっています。

本特集「大学図書館における研究開発」では、比較的近年に研究開発室が設置された京都大学附属図書館と筑波大学附属図書館の活動事例を詳しくご紹介いただきました。また、研究開発機能を強化するための大学間連携について貴重な提言をいただいています。本特集が、大学図書館における研究開発の進展に少しでも貢献できることを期待しています。

最後になりましたが、本特集の論文は、諸般の事情により投稿から１年を経ての掲載となりました。執筆者の皆様には刊行が遅れましたこと、深くお詫び申し上げます。そのため事例については2009年度の状況が中心になっていますが、何とぞご了承ください。

2011年３月